

## 4. 采女城主後藤家の歴史

### 平安時代

采女城主後藤家はもと藤原利仁の流れをくむ河内の武士であったが平安時代末期の則明のとき後藤姓に替え、子孫は栄えて天下の大姓となった。則明は前九年の役に、4代後の実基は屋島の合戦に活躍し、『陸奥話記』や『平家物語』などの戦記にその名を残している。

#### <文献>

- ・采女城主後藤氏は藤原利仁の流れをくむ河内の武士 平安時代末期には都の警備にあたる内舍人（うどねり）・検非違使に就く（『姓氏家系大辞典』）
- ・後藤則明 藤原姓を廃し後藤姓を名乗る（後藤家始祖）源頼義の郎党として前九年の役（1051-62）に活躍 麾下七将に名を遺す（『姓氏家系大辞典』・『陸奥話記』）
- ・後藤実基 平治元年（1159）平治の乱待賢門の合戦で武功（『平治物語』）、養子基清と共に元暦二年（1185）屋島の合戦で活躍（『平家物語』）

### 鎌倉時代

鎌倉幕府成立後は幕府の有力御家人として評定衆・検非違使・守護・地頭などの要職に就き、歴代の名は幕府の歴史を記した『吾妻鑑』に頻繁に登場している。鎌倉時代初期の歌人西行（俗名佐藤義清）の甥の基清は後藤実基の養子となって守護・地頭を歴任した。このことから基清が采女を領したとする江戸時代の地誌もある。基清は後鳥羽上皇が幕府に反旗を翻した承久の乱では上皇側について敗れ、実子である基綱により処刑されたことで知られる。

基清から3代目に当たる基秀の時、采女郷の地頭職に任ぜられて城を築いて住んだと後藤家系図は伝えているが、これを証する文献は見つかっていない。

#### <文献>

- ・後藤基清 鎌倉幕府御家人 実父は西行と兄弟 検非違使、讃岐国守護、播磨国守護、伊勢国一志郡河口荘地頭、丹波国志楽荘地頭（『吾妻鑑』・『国史大辞典』）  
元久二年（1205）平賀基雅の乱に活躍（『吾妻鑑』）  
承久三年（1221）承久の乱に後鳥羽上皇に参じて幕府と戦い敗北、子基綱により斬首さる（『吾妻鑑』）  
文治三年（1187）後藤兵衛基清采女郷を領す（『布留屋草紙』・『勢陽五冷遺響』）  
→采女城築城 基清説
- ・後藤基秀 使（検非違使）讃岐守 山田郷地頭（尊卑文脈・三国地誌・姓氏家系大辞典）  
文応元年（1260）三重郡采女郷地頭職、采女城築城（「後藤系図」）→基秀説

### 南北朝時代

後醍醐天皇による倒幕計画（元弘の乱）に加わったと地誌は伝え、後藤系図では伊勢国司北畠に仕えたとある。下って伊勢国守護であった仁木義長が伊賀・伊勢の武士を率いて近江の佐々木六角入道宗永と戦ったとき、討死した武士の中に後藤弾正の名がある。これらのことから後藤家が北勢地方の有力武士であったことがうかがえる。

## <文献>

- ・後藤基久 采女郷に住し北畠国司に仕える（「後藤系図」）
- ・元弘の乱（1331～33）では後醍醐天皇に仕える（『勢陽五鈴遺響』・『神戸平原地方郷土史』）
- ・延文五年（1360）伊勢国守護仁木義長は伊賀・伊勢の兵を起し南朝に加担、近江葛木山にて佐々木六角入道宗永と合戦、後藤弾正討死す（『太平記』・『勢州軍記』・「後藤系図」）

## 室町時代-戦国時代-安土桃山時代

後藤家は室町幕府成立後も北畠家の家臣団の一員に連なり、また内宮の命によって他の領主の取り締まりをするなど一定の力を持っていたようである。

応仁の乱の後、戦国時代に入ると北勢四十八家といわれた中小豪族の中にあつて、ある時期足利将軍家に、また近江六角家あるいは亀山関氏など有力守護大名の傘下に属した。やがて織田信長の伊勢侵攻による動乱の中で亡びた。戦って落城したとする説と、追われて浪人となったとする説がある。

## <文献>

- ・伊勢国司北畠家臣帳に後藤淡路守平氏維盛末流四日市市采女城主あり（『三重国取り物語』）
- ・また別文献の北畠家諸氏方に後藤但馬守・後藤淡路守あり（『北畠氏の研究』）
- ・文明十二年（1480）長野氏と北伊勢国人・北畠連合軍が采女城で戦い、北畠勢は損害を出している（『四日市市史』）
- ・明応三年（1494）後藤氏は内宮の命により違乱（決まりに背いて秩序を乱すこと）のあった領主の停止と、上分（年貢の一種）の押領を行った。（『四日市市史』）
- ・北方諸侍 宇野部後藤家は二百騎の大將 四十八家あり いずれも一も同心して足利将軍家に仕え侍る也（『勢州軍記』・『勢州四家記』）
- ・弘治年中（1555-58）近江国六角氏の北勢進出に伴いその配下に入る（『勢州四家記』）
- ・千草・宇野部（采女）は亀山関氏の勢力拡大に味方す（『勢州軍記』）
- ・永禄十一年（1568）織田信長と戦い落城す（『布留屋草紙』『伊勢名勝誌』）

### →落城合戦説（註）

- ・永禄十一年（1568）宇野部、信長に属して高岡城を攻む（『勢州軍記』）
- ・元亀元年（1570）後藤藤勝 氏神火宮社頭を造営す（『三国地誌』・「後藤系図」）
- ・元亀四年（1573）関盛信は六角家に一味して敵対したため信長の勘当を受けて日野蒲生家に預けられた。これにより関家に与力していた宇野部以下 16 家の侍は神戸信孝を奉ずるか浪人となる（『勢州軍記』） →落城 浪人説
- ・天正十二年（1584）後藤忠基（藤勝の子）信雄秀吉戦争で信雄側の加賀井氏に加勢、加賀井城にて戦死す（「後藤系図」）
- ・天正十二年（1584）小牧長久手の戦いで織田信雄方として戦い戦死した武士の中「采女・後藤」の名がある（『四日市市史』）
- ・天正十三年（1585）『織田信雄分限帳』には知行を受けている家臣の中に後藤の名前があり、五百五貫文を領していた（『四日市市史』）

註：複数の地誌が伝える織田信長伊勢攻略における北勢地域の落城は 15 を数え、うち永禄 11 年は 13 にのぼる

## 江戸時代以降

「後藤系図」には江戸幕府成立後も享保年代まで四代を記し、三重郡宇野部（采女？）に住むが伊勢大乱に際して一時期尾張愛知郡に避難するも、その後は伊勢国に戻り多気郡明和町大淀に住む。「由来記」によれば後藤家の子孫は明和町のほかに鈴鹿市神戸町にも見え、後藤采女正亡き後の二つの流れを記している。

これらとは別に尾張徳川家家臣の中に伊勢国采女村生まれ「後藤重春 庄太夫」の名があり元和9年（1653）から延享元年（1741）まで子孫29名の名を載せた文献があるが、「後藤系図」と一致する名がなく采女城との関係は不明、謎である。

### <文献>

- ・後藤武基 後藤喜三郎 三重郡采女部に住す（「後藤系図」）
- ・後藤武秀 勢州大乱の時 姓を畑中に代え尾州愛知郡野間柿並村に逃避して潜み住む（「後藤系図」）
- ・後藤武貞 畑中彦助 貞享二年（1685）鳥羽城主土井周防守の命に依り伊勢国多気郡大淀を開拓し田地と為して大堀川新田と名づく、此地に居を移して、ふたたび姓を更え（かえ）後藤と号す（「後藤系図」）
- ・尾張徳川家家臣団  
後藤重春 「生国勢州枝付采女村 松平甚太郎家忠に仕え、その後忠義卿に仕え奉る。富永丹波守に属して関が原の役に供奉し、尋ねて敬公に仕え奉る。大阪の役竹腰山城守に属して二百五十石を領す、元和九年。亥十月三日卒」  
（『士林訴洵（しりんそかい）：尾張藩士の系譜を集めた系図資料』）

### 註

由来記：『采女城後藤家の由来記』 内部郷土史研究会 平成元年

後藤系図：「藤原姓後藤系圖（写）」 秦茂一氏筆写 昭和56年（1981）

付表 後藤家年表 (後藤家初代より二十一代の事績を掲載した。文献により諸説あるところはそのままとした。)

当主	西暦	和暦	由来・事績	説明
基清	1195 1199 1205 1214 1221	建久六年 建久十年 元久二年 建保二年 承久三年	源頼義の郎党・藤原姓を改め後藤を号す。後藤家始祖(姓氏家系大事典第二巻上)頼義に従い「前九年の役」に参戦、「黄海(きのみ)の戦い」で敗れた頼義を助けた麾下(きか)七将の一人として名を残す。(陸奥話記)	前九年の役 1099年(天喜4)から99年(康平5)まで、陸奥守兼鎮守府将軍源頼義と陸奥国の安倍氏の一族との間で戦われた戦乱。
實基	1185 1204	元暦二年 元久年間	平治の乱の御所待賢門内外における合戦で功を挙げ(平治物語・後藤系図)源義朝公の二女を養育し、義朝公嫡男源頼朝公が天下人になるや、姫を一条の二位中将能保卿に嫁す(源平盛衰記Ⅱ後藤系図・保元物語平治物語人物一覽)子基清と共に、屋島の合戦に活躍す(吾妻鏡・平家物語・後藤系図)元久の乱後本郡(采女村)を管す(伊勢名勝誌)	平治の乱1159 後白河上皇の近臣間の暗闘から源平武士団が対立 平氏が勝利し平家の世となる
實遠			後藤左衛門尉(後藤系図)	
實信	1100頃		白川院(1086-1129)の武者所に属す(後藤系図・尊卑文脈)	
公廣			右衛門尉 後藤と号す(後藤系図)	
實清			実父は佐藤義清(西行)の兄弟佐藤仲清、後藤実基の養子となる。鎌倉幕府の有力御家人として検非違使・守護・地頭職を歴任。後年は御家人の傍ら後鳥羽上皇に仕え西面の武士となり、従五位上に叙せらる(日本古代中世人名辞典)養父実基と共に屋島の戦いに参加。戦功を上げる(吾妻鏡・平家物語)伊勢国一志郡河口荘地頭(吾妻鏡・角川日本地名大事典34巻)後藤基清文治三より領す(布留屋草紙ほか 右河口荘と錯誤か?)丹波国志染荘地頭(三分の一没収)(吾妻鏡)讃岐守護職を罷免される(吾妻鏡・国史大事典・後藤系図)平賀朝雅の乱に際し、討伐に活躍す(吾妻鏡)播磨守護(国史大事典7巻)承久の乱において後鳥羽上皇側に参じて敗れ、命により自身の子基綱により処刑さる(吾妻鏡・後藤系図)	屋島の戦い1185 屋島を舞台にした源平合戦 この後の壇の浦の戦いで平氏が滅び鎌倉幕府へと続く 武士の世が始まった 承久の乱1221 後鳥羽上皇が鎌倉幕府に対して討幕の兵を挙げて敗れた兵乱。

当主	西暦	和暦	由来・事績	説明
基綱	1121 1229 1252 1256	承久三年 寛喜元年 建長四年 康元々々年	六月承久の乱の後 幕府方の功労者調べにあたる(吾妻鏡) 七月命に依り養父基清を処刑す(吾妻鏡ほか) 幕府方に味方して功あり 検非違使の宣旨を蒙る(吾妻鏡) 引付衆に加わる(吾妻鏡) 十一月大廿八日卒(吾妻鏡・後藤系図)	
基政	1238 1261 1263	嘉禎四年 弘長元年 弘長三年	將軍家春日社御参に水干を着て隋兵(吾妻鏡・後藤系図) 引付衆に加わる(吾妻鏡) 六波羅評定衆(国史大事典14巻・尊卑文脈)	
基秀	年代不明 1260 1260	年代不明 文応元年 文応元年	讚岐守改め伊勢守 検非違使(由来記・尊卑文脈) 將軍家鶴岡宮御参の駕籠傍に供奉す(吾妻鏡) 先陣に加わり功あり 伊勢の国三重郡采女郷地頭職に補せられ 宇野山(采女山)に城郭を築く(後藤系図・由来記) 山田郷地頭(尊卑文脈・三国地誌)	
基秋	1360	延文五年	伊勢国守護仁木義長は南朝に加担 近江葛木山にて佐々木六角入道宗永と合戦 後藤弾正討死す(太平記・勢州軍記・後藤系図では弾正忠は後藤基秋)	
基藤	年代不明	年代不明	後藤弾正忠(二木義永の謀反に加担して討死したのは基藤か?)(後藤系図) 基藤は南朝の忠臣北畠氏に仕えて後醍醐天皇に忠誠を捧げる(由来記)	
基久	年代不明 1331	年代不明 元弘元年	采女郷に住し、北畠国司に仕う(後藤系図) 元弘の役において北畠国司に従い後醍醐天皇に味方す(後藤系図・由来記)	元弘の乱 元弘元年(1331) 後醍醐天皇が計画した鎌倉幕府討滅クデーター
基満			後藤弾正左衛門(後藤系図)	
匡基			後藤但馬守(後藤系図)	

当主	西暦	和暦	由来・事績	説明
方綱	1516 1536 1584	永正十三年 天文五年 天正十二年	丙子二月生(後藤系図) 氏神火宮御社頭を造営す(後藤系図・三国地誌ほか) 五月六日美濃青野原において戦死 年三十五(後藤系図)	青野原の戦い 北畠顕家率いる南朝方と土岐頼遠らの北朝方との戦い
藤勝	1544 1567 1568 1570 1572 1573	天文十三年 永禄十年 永禄十一年 永禄十一年 元亀元年 元亀三年 元亀四年	甲辰誕生 後藤采女正(後藤系図) 北方諸侍宇野部 信長にしたがい楠城を攻む(勢州四家記) 織田信長伊勢攻略(第三回目)に宇野部(名は不詳)は信長幕下に属し高岡城を攻む。また北勢諸侍と共に勢州奉行滝川一益の与力となる(勢州軍記) 後藤采女正 織田信長に滅ぼされ城遂に廃す(伊勢名勝誌ほか) 氏神火宮御社頭を造営す(永禄十三年は元亀元年)(後藤系図・三国地誌) 関家と織田家勘当の時 蒲生家と一味して織田信長に滅ぼされ城遂に廃す その際千奈美姫が落城の時深井戸に身を投げて死亡す(由来記) 関盛信が信長の勘当を受け、日野蒲生家に預けらる。これにより関家に与力していた宇野部以下16家が神戸信孝に付くか、浪人した(勢州軍記)	信長の伊勢侵攻 第1回永禄10年2月滝川一益桑名・員弁郡を平定 第2回永禄10年8月信長勢が朝明・三重郡を降し、高岡城を攻略、中断 第3回永禄11年2月高岡城、神戸城を攻略し和睦、菴芸郡・安濃郡を平定 第4回永禄12年8月南勢の北畠氏を攻略し、和睦
忠基	年代不明 1584	年代不明 天正十二年	幼名二郎丸 織田家に属し處々出陣す(後藤系図) 信雄秀吉戦争の時 加賀井駿河守に加勢して濃州加賀井に籠城す 五月六日加賀井城にて戦死す(後藤系図・四日市市史)	
武基	年代不明	年代不明	後藤喜三郎 三重郡宇野部に住す(後藤系図)	
武秀	年代不明	年代不明	後藤喜兵衛 勢州大乱の時母に随い逃避して尾州愛知郡野間柿並村に潜み住む 母姓に改め畑中と号す(後藤系図)	
武之	年代不明	年代不明	畑中喜左衛門 母 三好氏女(後藤系図)	
武貞	1685 1730	貞享二年 享保十五年	鳥羽城主土井周防守の命に依り伊勢国多気郡大淀を開拓し大堀新田と名づく 此地に居を移して、ふたたび姓を更え(かえ) 後藤と号す(後藤系図) 八月七日没(後藤系図)	

文献記録のうち後藤家の人物との対応が明確でないものを次表にまとめた。なおこれ以外にも人物対応が明らかでない記述が『勢州軍記』にあるが、永禄年間であるので藤勝の項に記載している。

当主	西暦	和暦	由来・事績	説明
	1480	文明十二年	<p>応仁の乱が終息した文明8年ごろから北勢進出を謀る北畠氏と安濃・奄芸郡を基盤とする長野氏とが鈴鹿・河曲郡において抗争を繰り返してきた。文明12年には伊勢国人、北畠連合軍が長野氏と「後藤之城」で戦った。(三重県史・四日市市史) 後藤氏は北畠方であったと推測される。</p> <p>内宮の命に依り、後藤氏が違乱のあった者への上分の押領を行う。(四日市市史)</p> <p>内宮は後藤氏に上分を神宮代官に渡すよう書状を遣わす。(四日市市史)</p> <p>16世紀に六角氏の勢力が北伊勢に及んでくると、後藤氏はその被官として活動、勢力を伸ばしていった。(四日市市史)</p> <p>宇野部 六角右京大夫にしたがう(勢州四家記)</p> <p>宇野部 後藤家は二百騎の大將四十八家なり(勢州四家記)</p> <p>宇野部(采女) 亀山関氏の勢力拡大に味方す(勢州軍記上)</p>	
1494	明応三年			
1498	明応七年			
十六世紀				
1555	弘治年間			
年代不明	年代不明			
年代不明	年代不明			

註

「後藤系図」…藤原姓後藤系図

『由来記』…采女城主後藤家の由来記

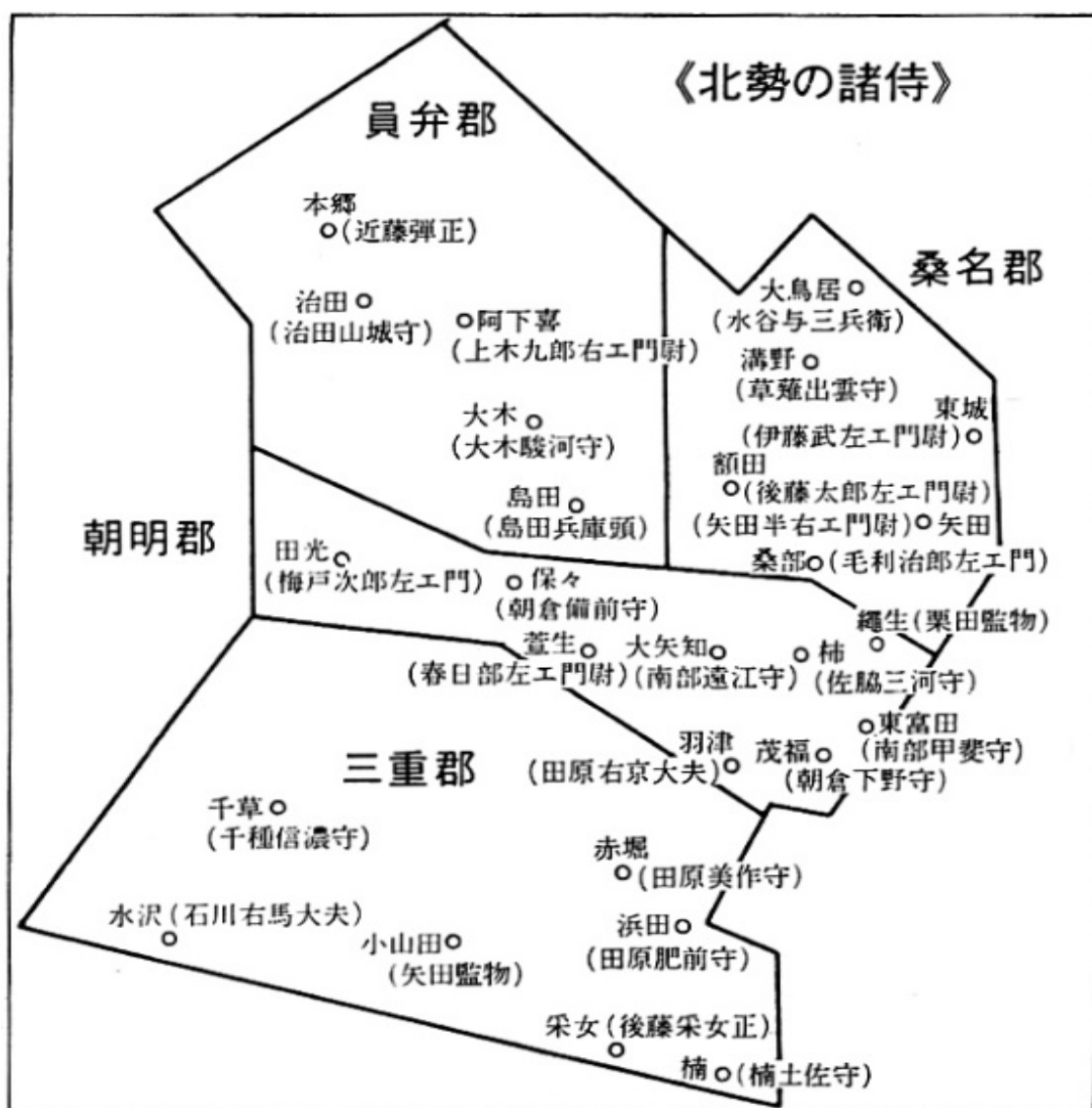
### 付図3 北勢四十八家

#### 北方諸侍の事 (『勢州軍記』)

「北方諸家は、源平以後、北條・足利の代々、領地を給わるの人々なり。まず三重郡千草家、是一千の大將なり。同郡、宇野部、後藤家、是れ後藤兵衛實基の後胤なり。・・・(略)以下諸侍四十八家有りと云々。各々足利家の侍たり。一味同心の者なり。」

#### 北勢の諸侍 (『日本城郭大系 10』)

伊勢北郡諸士録 (内閣文庫蔵)





## 付図4 15世紀中ごろの伊勢・志摩の諸勢力

(『三重県史通史編中世』より一部編集)

### 勢州分領の事 (『勢州軍記』)

「近來伊勢の国は諸家凡そ四分して之を守護す。南五郡は北畠の領地なり。北八郡は工藤一家(長野に居住して長野家を号す)、関の一党其の外北方諸侍の領地なり」

(注：南五郡は壹志、飯高、飯野、多氣、渡会。

北八郡は桑名、員弁、朝明、三重、鈴鹿、河芸、菴芸、安濃)



図6-2 15世紀中頃の伊勢・志摩の諸勢力

## 付図5 15.16世紀北伊勢国人分布図

(この図は「三重県史通史編中世」より15.16世紀伊勢国国人分布図を基に四日市市内の中世城館跡を追記したものである。)





付図6 内部川水系の中世城館跡



①	水沢城	水沢町字東条 応永5年1398加治信濃守築城
②	城の山城	水沢町字東条 正安2年1300坂田信濃守重次築城
③	山田城	山田町字吉ヶ原 応仁中1467—9 矢田監物丹波国から来住築城
④	采女城	采女町字北山 文治年中1180年代 伊勢平氏後藤基清ここに拠
⑤	小古曾城	小古曾五・六丁目 年代不明 国司北畠家臣小古曾左近将監居住す
⑥	川尻城	川尻町字古城・字古屋敷ほか 室町時代 伊勢平氏の流れをくむ有田氏が拠

参考文献：

城館跡名および所在地は『四日市市史第4巻資料編文化財』

来歴は『三重の中世城館』による。これによれば采女城は後藤基清が築いたとしている。